

# Message

## 定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授  
関崎 春雄

1974年の開校時に音別の教養部に開設された薬用植物学教室(主宰:木村康一初代薬学部長)の助手として赴任以来37年になります。健康に心配せずに過ごせたことを、丈夫に育ててくれた両親に感謝しています。

開設時の若いエネルギーを学生との植物採集や薬草園の整備に費やしたことが今の薬用植物園を発展させるのに多いに役立ったものと懐かしく思い出しています。1979年から2年間の永きにわたり、木村先生のご尽力でハーバード大学化学科(岸義人教授)に留学する機会に恵まれました。帰国後、薬学部の薬品物理化学に配置換えとなり、2003年から現在の創薬化学講座(生薬学)に移りました。従いまして、薬用植物学実習、無機化学、薬品物理化学、生薬学と時代とともに担当科目が変わったため、卒業生の会合にでますと「私は先生に何を習った、

私は何だった」との話題で盛り上がりします。

恩師の「研究を続けるなら自分のアイデアで、良い雑誌に最低年齢分の論文をだしなさい」との言葉を守りたく必死に研究してきました。その研究生活の集大成として、大学側のご理解と薬用植物園の職員のご努力および大学院薬学研究科のご支援で、「北方系伝統薬物研究センター」を設置できたことは大きな慶びです。今後、皆様の有意義な活用を祈念いたしております。

最後になりましたが、永い間ご指導、ご協力頂いた教職員の皆様に感謝するとともに、本学の益々のご発展をお祈りいたしております。



薬学部 教授  
宮崎 正三

1981年10月に本学に赴任して以来、約30年の年月が経過しました。長きにわたり何とか恙なく職務を全うできたのは、偏に多くの皆様からいただいたご指導・ご支援によるものと、心より感謝しております。

「大学」は教育と研究の場であり、したがって、教員の仕事も教育と研究にあります。薬学における教育目標は薬剤師の養成にあり、学生諸君がこの目的を明確にし、大学生活を有意義に過ごし、卒業後は薬剤師として生き甲斐のある仕事をしてもらうことが大学教育に携わる一教員としての願いです。今後も、薬剤師としての使命感をもち、次世代の薬学を背負うリーダーが本学から一人でも多く育たれんことを願っています。

これまで、国内外の研究機関や医療施設と共同で、「薬物治

療の最適化および精密化」を目指したDDSの開発研究を実施してきました。特に、英国マンチェスター大学のAttwood教授との20年以上にわたる研究は、私自身の教育・研究の視点を広げる貴重な機会であり、公私とも忘れがたいものがあります。

今折しも、我が国の薬剤師をとりまく環境は大きな転換期を迎えています。2006年から薬学教育は大きく変わり、本学では6年制の薬学一貫教育が進行し、新たな教育・研究体制や付随する諸設備もほぼ整いつつあります。今後は、より一層、質的にも充実・発展していかれることを期待しています。

これまでご厚情・ご協力をいただいた多くの皆様に深謝申し上げますとともに、本学の益々の発展を祈念いたします。



薬学部 教授  
樋口 孝城

定年退職にあたり、私の我儘に長年お付き合いいただいた多くの方々に感謝いたします。1979年に当時は白糠郡音別町にあった東日本学園大学教養部に赴任してから31年余、有るか無きかの大学への貢献にも関わらず、無事定年の日を迎えられることを、心よりありがたく思っております。

私が主に接してきた学生は1年生でした。現役入学組は18歳です。赴任当時の私は33歳。学生との差は15歳。学生から見てどうかはともかく、私自身は年長的にも、体力的にも学生に近いという感覚がありました。爾来、私は毎年1歳ずつ齢をとってきましたが、1年生は毎年18歳です。確実に1歳ずつ離れていきます。でも、ありがたい(かどうかはともかく)ことに、私自身の実感年齢は学生側に引き寄せられて、常に実年齢を下回っていました。こ

れを「いつまでも若い」というべきか、「いつまでたっても成長しない」というべきか、難しいところです。

所属は教養部、基礎教育部、薬学部人間基礎科学講座と変わってきましたが、私の気持は初年時教育に関わるということで、基本的には変わってきませんでした。これが果たして良かったかどうかわかりません。教育の望ましいあり方がとうとうわからないまま終わってしまいました。大学を取り巻く諸情勢の変化、学生の変化、これらに対応するには新しい発想が必要だと思います。北海道医療大学の次の時代を背負っていく若い方々に期待します。